

大ヴォローヂャと小ヴォローヂャ

ВОЛОДЯ БОЛЬШОЙ И ВОЛОДЯ МАЛЕНЬКИЙ

アントン・チェーホフ Anton Chekhov

青空文庫

「ね、馭者ぎよしゃをやつて見てもいいでしょう。私、馭者のとこへ行くわ！」とソフィヤ・リヴォヴナが声高こゝろだかに言った、「馭者さん、待つてよ。私、あんたの隣へ行くから。」

彼女が櫛そりの中で起たちあがると、夫のヴラヂーミル・ニキートイチと、幼な友だちのヴラヂーミル・ミハイルイチとは、倒れぬように彼女の腕を支えた。トロイカは疾走している。「だから、コニヤツクを飲ませてはいけないと言つたじゃないか」とヴラヂーミル・ニキートイチが連れの耳に忌いま々まし氣げにささやいた、「本当に君は何という男だ！」

大佐はこれまでの経験で、自分の妻のソフィヤ・リヴォヴナのような女が、少し酔い加減ではしやぎ廻まわつた挙句は、きつとヒステリックに笑い出し、それから泣き出すものなことを知っていた。家へ帰つても寝るどころか、湿布しつぷだ水薬だと騒さわがなければなるまいと、心配であった。

「ブルルル！」ソフィヤ・リヴォヴナが叫んだ、「馭者をやるんだつてば！」

彼女はとても陽気で、勝ち誇つたような氣持だった。結婚の日からかぞえてここ二カ月のあいだと言うもの、自分がヤアギチ大佐と結婚したのはつまり打算からであり、また世間で言う自棄バル・デピ半分なのだったという考えに、絶えず悩み通した。それが、やつと今日にな

つて、郊外の料理店にいたとき、やはり自分は夫を熱愛しているのだと悟ったのであった。夫は、五十四という年齢に似合わぬ調和のとれた、器用な柔和な男で、気の利いた洒落しゃれも飛ばせば、ジプシイの唄に合くちずきわせて口吟くちずきんだりもした。実際この頃では、老人の方が若者より千倍も快活で、まるで老人と若者が持役の取り替えっこでもしたようである。大佐は彼女の父親より二つも年上なのだが、それでいてまだ二十三の彼女よりもずっと精力旺盛であり、生き生きと元氣がある以上、何の文句もない筈はずではないか。

『ああ、私の夫はとても素敵すてきだわ！』と彼女は思った。

レストランで彼女は、以前の感情はもはや閃ひらめきすらも残っていないことを悟った。幼な友だちのヴラヂーミル・ミハイリイチ（つづめてヴォローヂャと呼んでいたが）には、つい昨日まで半狂乱の態で、報いられぬ思慕を捧たげていたのに、今ではすっかり何の気もなくなってしまう。今晚の彼は不活ふかつぱつ澆じょうで睡ねむたげで、何の興味もないつまらぬ人間に思われたし、いつもの事ながら、料理の勘定になると知らん顔で冷然と構かまえている態度が、今夜という今夜こそ彼女にとつて、ひどく腹立たしかつた。「お金がないなら、家に坐まっていらつしやいよ」と、そう言つてやりたいほどだった。勘定は大佐が一人でした。

樹立こたちや電柱や斑まだらら雪が、絶えず彼女の眼をかすめ過ぎるせいせいか、ひどく取り留めのない

考えが後から後から浮かんで来た。彼女は思った——レストランでは百二十ルーブル払った。ジプシイに百ルーブルやった。明日になって、もし気が向けば、千ルーブルのお札を風に飛ばすことだつて出来る。それが、つい二た月前まで、つまり結婚する前は、自分のお金がたつた三ルーブルでもあつた例しがない。こまごましたものを買う時にも、いちいちお父さんにねだらなければならなかつた。何という変わりようだろう！

思ひはもつれてきた。自分がまだ十歳ほどの頃、現在の夫のヤアギチ大佐が叔母さんに言い寄つて、そのお蔭で叔母さんの身の破滅になつたと、家じゆうの者が噂うわさしていたことを思い出した。本当に、食堂に出て来る時でも、叔母は眼を泣きはらしていたし、始終どこかへ外出がちであつた。可哀そうに、どこへ行つても心は安まるまいに、などと人々は話し合つていた。その頃、彼は非常な美男子で、女にかけては並々でない腕の持主であつた。町中で彼を知らぬ者はなく、てんでに彼のことを医者や患者廻りをするように、毎日自分に参つてゐる婦人たちを一巡訪問して歩くのだ、などと噂した。今では、髪に霜がまじり、顔には皺しわが出て、眼鏡さえかけているが、それでも時たまその瘦やせた横顔などが、綺麗だな、と思わせることもあつた。

ソフィヤ・リヴオヴナの父親は軍医で、一時ヤアギチ大佐と同じ聯隊れんたいに勤務していた

ことがあつた。ヴォローヂャの父親もやはり軍医で、やはり彼女の父親やヤアギチと同じ聯隊に勤めていたことがあつた。ヴォローヂャは色々面倒な恋愛問題を持ち上げたりしながら、学校の成績はなかなかよかつた。そして大学を優等で卒業して、今では外国文学を専門にして行こうと決めていた。何でも学位論文を書いているという評判だつた。彼は父の軍医と一緒に兵營の中で起居ききよして、もう三十になるのに自分のお金が一いち文も無いのであつた。子供の時、ソフィヤ・リヴォヴナと彼とは一つのアパートメントに住んでいたことがあつて、よく遊びに来たし、一緒に舞踏やフランス語の会話のお稽古をした事もあつた。けれど、彼が成長して立派なとても美しい青年になつた時、彼女は含羞はにかむようになり、間もなく夢中になつて恋こい焦こがれるようになった。この恋心は彼女がヤアギチと結婚するその日まで続いた。

彼もやはり、十四になるかならぬうちから、女にかけてはなかなかの凄腕すごうでで、彼ゆえに良人おとこを裏切つた夫人たちは、ヴォローヂャはまだほんの子供だもの、と口実を使うのだつた。この間も、こんな話をした男があつた。——彼がまだ学生で、大学の近所に下宿していた頃は、誰かが訪問に行つて彼の扉を叩くと、きつと扉の後ろで彼の靴音が聞こえ、それから「失敬パルドン、僕ジユ・ヌ・スイ・パスールいま一人じやないんだ」と忍び声で断りを喰つたものだと言うので

ある。ヤアギチは彼と知り合いになると、すっかり肝胆相照すようになり、ヂエルジャヴィンがプーシキンを遇したように、大いに見込みがあると祝福するのであった。打ち見るところ、少なからず彼が気に入らしたらしい。二人は何時間もぶつつづけに物も言わず撞球うきゆうやピケットという骨牌遊カルタびをするし、ヤアギチがトロイカでどこかへ出かけるときは必ずヴォローヂヤを連れて行つた。ヴォローヂヤの方でもヤアギチだけには論文の秘密を打ち明けていた。はじめのうち、大佐がまだ若かつた頃には、互いに競争者の位置に立つたことも一再ではなかつたが、そんな時でも嫉妬しつとし合つたことなどは決してなかつた。彼等の交際仲間では、ヤアギチは大ヴォローヂヤで、その親友は小ヴォローヂヤと綽名あだなしていた。

その櫛には大ヴォローヂヤ、小ヴォローヂヤ、それからソフィヤ・リヴォヴナのほかに、もう一人、皆がリイタと呼び慣わしているマルガリイタ・アレクサンドロオヴナも乗つていた。これはヤアギチ夫人の従姉いとこで、もう三十を越した、顔色の悪い眉毛まゆげの濃い、鼻眼鏡の老嬢であるが、烈はげしい寒風のなかでも小休みもなく巻煙草まきたばこを喫すうのが癖で、胸のあたりや膝ひざの上に煙草の灰を絶やしたことがない。鼻声で、一語一語を引き伸ばして話す。冷血な生まれつきと見えて、リキュールやコニヤックをいくら飲んでも酔っぱらいもせず、

だらだらした面白くもない調子で、陳腐なひとくちばなし一口噺を並べ立てるのであった。家に居ると、朝から晩まで何やら厚ぼったい雑誌に読み耽よふけつてそれを煙草の灰だらけにするか、さもなければ凍り林檎こおりんごをむしやむしややっていた。

「ソーニヤ、騒ぐのはおやめつたら」と彼女が間のびのした声で言った、「本当に馬鹿みたいよ。」

町の門が見えはじめると、トロイカは速力を緩め、家並や人々の姿がちらちらした。ソフィヤ・リヴオヴナはすっかりおとなしくなつて、夫に寄りかかったまま、物思いに沈んでしまった。小ヴオローヂャは向い側に坐っていた。今までの陽気な浮々うきうきした考えに、だんだん暗い影がさし始めた。彼女は思った——この眼の前に坐っている男は、私が思いを寄せていたことを知っているのだ。それだけでなく、自分が大佐と結婚したのは自棄半パル分だデレという世間の取沙汰とりざたをそのまま信じているにちがいない。彼女はまだ彼に恋を打ち明けたことはなかったし、自分の恋を彼に知られたくないので感情は包みかくしていたが、彼の顔つきで見ると、すっかり自分の心の中を読んでいることは明らかであった。そのため、彼女の自尊心は痛んだ。それよりもなお屈辱に思われるのは、結婚して以来眼に見えて小ヴオローヂャが彼女に近づきはじめたことで、そんなことは今まで決してないことで

あつた。黙り込んで彼女の傍に何時間も坐り込んでいたり、でなければ無駄話で御機嫌を取ったりする。今でも櫛の中で、まともに話しかけこそしないが、そつと足を踏んでみたり、手を握りしめたりする。してみれば、彼は彼女の結婚するのを待ち設けていたにちがいない。そして今では、彼女を蔑さげすんで、心中ひそかにだらしない不貞な女に対する、一種の興味を起こしているにちがいがなかつた。そう思うと、折角の勝ち誇つた気持や夫への愛情が、たちまち苦しい屈辱や口惜しさに掻き乱され、腹立ちまぎれに馭者台にあがつて、大声を出したり口笛を吹いたりしたくなるのであつた。……

丁度この時、彼等は尼僧院にそういんの前を通りかかつて、折から千貫の大鐘が鳴りはじめた。リイタが十字を切つた。

「この尼僧院には私たちのオーリヤが居るのよ」とソフィヤ・リヴォヴナは言つて、やはり十字を切つたが、その身は打ち顫ふるえた。

「なぜ尼僧院になんか入つたんだらう？」と大佐は訊きいた。

「自棄半分バル・デビ」とムツとしてリイタが答えた。ソフィヤ・リヴォヴナとヤアギチの結婚に當つてついているにちがいない。「自棄半分バル・デビつていうのが、このごろは流行なのね。世間じゅうの人に齒向かうんだわ。あの人はおきやんきやらの手に負えない浮気やさんで、舞踏会

やお取巻き連中に夢中だったのに、いきなり——ねえ、どうでしょう！　びっくりするじやないの。」

「そんな事はないですよ」と小ヴオローヂャが、外套がいとうの襟えりを下げて秀麗な顔を見せながら言った、「あの人は自棄パル・デビ半分じやありません。いわば重なる不幸のためなんです。兄さんのドミートリが懲ちようえき役やくになったまま、今では行く方ゆえが知れないのですよ。お母さんは悲嘆のあまり亡くなるし。」

そして外套の襟をまた立てた。

「だからオーリヤはいい事をした訳ですよ」と彼は籠こしもつたような声で附け足した、「貰もらい子の身分になって、おまけにソフィヤ・リヴオヴナみたいな宝石と一緒にや、やりきれませんものね。」

ソフィヤ・リヴオヴナはその声の中に嘲あざけるような調子のあるのを聞き漏もらさなかった。何か辛辣しんらつなことを言つてやりたかったが、黙つて我慢した。またもや忿怒ふんぬがむらむらと湧わいて来た。彼女は起ちあがつて、涙声で叫んだ。

「私、朝のお勤めに出るわ。馭者さん、引き返して！　オーリヤに会いたくなかったの。」
櫓こしは後戻りした。僧院の鐘は沈んだ響きを伝えて、それを聞いていると何となくオーリ

ヤの事や自分の生活が思い出されてきた。ほかの教会でも鐘が鳴っていた。馭者がトロイカを停めると、ソフィヤ・リヴォヴナは櫓を滑り出て、皆を残して一人で門の方へ急いだ。「早くして貰いたいな」と夫が後から声をかけた、「もう遅いんだからね。」

彼女は暗い門をくぐり、そこから本堂へ導く並木路を歩いて行った。足の下には雪がさくさくと音を立てた。鐘の音はもう頭のすぐ真上に来ていて、身体じゅうに沁みわたるように思えた。本堂の扉があつて、そこを三段ほど下りると柱廊で、両側には聖者の画像が連なり、白壇びやくだんと抹香まつこうの匂いがたち籠めている。もう一つ扉があり、黒い人影がそれを開いて低く低くお辞儀をした。……勤行はまだ始まっていなかった。一人の尼僧は聖像屏の傍に沿うて燭台しよくだいに灯を入れて廻り、もう一人は杖つき燭架に灯を入れていた。円柱のあたりや唱歌席のここここに、黒い人影がひっそりと佇たたずんでいる。「あの人たちはああして立ったまま、朝まで動かないのかしら」とソフィヤ・リヴォヴナは思った。彼女にはそこが暗く、寒く、わびしく、——墓場よりももっとわびしい場所に思われた。彼女はそのひっそりと凍りついたような人影を物寂しい気持で眺めているうちに、不意に胸が締めつけられるのを覚えた。尼僧たちのなかで、背の低い肩の細った、そして黒の頭布をまとった一人が、なぜとはなしにオーリヤのような気がした。オーリヤが僧院に入ったとき

には、もつと肥ふとつていて背ももう少し高かった筈だが。……ソフィヤ・リヴオヴナは心の乱れ騒ぐのを感じながら、おずおずとその平尼僧に近づいて、肩のそごしに顔を覗いて見るとやはりそれがオーリヤだった。

「オーリヤ！」と彼女は言うのと、両手をすり合わせたまま、胸がいつぱいになって、もう何も言えなかった。

「オーリヤ！」

尼僧はすぐに彼女と気がついて、驚いて眉をあげた。その蒼あおざめた、浄きよめてから間もない清らかな顔も、それから頭布からはみ出ている白い襟布までが何となく、歓よろこびに輝いたように見えた。

「何という不思議なお引き合せでしょう！」と彼女も、痩せた、蒼白い小さな両手をすり合わせながら言った。

ソフィヤ・リヴオヴナは彼女を強く抱きしめて接吻した。しながら、お酒の匂いがしはしないかと心配した。

「私たち今、この前を通りかかったの。そしてあんたの事を思い出してたのよ」と彼女は、まるで小走りに駈かけた後のように、息を弾はずませながら言った、「何て悪い顔色なの！ あ

あ私、……あなたに会えてとても嬉しいのよ。で、どう？ どんな具合？ 退屈じゃなくって？」

ソフィヤ・リヴオヴナはまわりの尼僧たちを見廻して、小声になって言いつづけた。

「私の方とはとてもの変わりようよ。……ねえ、私、ヤアギチと結婚したの。ヴラヂーミル・ニキートイチよ。あの人憶おぼえてるでしょう。……私、あの人と幸福に暮らしているの。」

「まあ、結構ですわ。お父様も御丈夫？」

「丈夫よ。よくあなたの噂をしているわ。ねえ、オーリヤ、お休みには私たちのところへいらつしやいな。いいでしょう？」

「行きますわ」とオーリヤは言つて微笑した、「あさつて上あがりますわ。」

ソフィヤ・リヴオヴナはなぜと自分でも分からないが泣き出してしまった。暫しばくの間、黙つて泣きつづけていたが、やがて涙を拭ふきながら言った。

「リイタはあなたに会わなかったことを、さぞ残念がるでしょうよ。あの人も一緒に来ているの。ヴォローヂャもいるのよ。みんな門の所で待つてるわ。行って会つてやったら、みんなどんなに喜ぶでしょう！ ね、行って御覧なさらない？ お勤めはまだ始まらないじゃないの。」

「参りましょう」とオーリヤは同意した。

彼女は三べん十字を切ってから、ソフィヤ・リヴオヴナと連れだって出口へ歩いた。

「あなた幸福に暮らしてらつしやるつて仰しやつたわね、ソーネチカ」と、門を出たとき彼女が訊いた。

「とてもよ。」

「そう、いいことねえ。」

大ヴオローヂャと小ヴオローヂャは、尼僧の姿を見ると櫓を下りて、丁寧に挨拶あいさつをした。二人とも、彼女の蒼白い顔や黒い僧服を見てひどく感動していた。自分たちのことを忘れずにいて、わざわざ挨拶に出て来てくれたのが、二人には嬉しかった。寒くないようにと、ソフィヤ・リヴオヴナは膝掛けを彼女にすっぽりと被せかぶ、自分の外套の半分で包んでやった。今しがたの涙で、彼女の心は安らいで明るくなった。そして、この騒々しい落着きのない、本当に汚れきつた夜が、思いがけなくこうして清浄に穏やかに終わったのが嬉しかった。彼女は、少しも長くオーリヤを傍に置きたくなつて提言した。

「ねえ、この人を乗せて走つてみないこと？ オーリヤ、お乗りなさいな。ほんの少しだけよ。」

聖徒はトロイカなどに乗って駈けずり廻らぬものだから、男たちは多分尼僧が断るだろうと思った。ところが意外にも彼女は承知して、櫓に乗った。そしてトロイカが町の門へ向かつて疾駆して行くあいだ皆は黙りこんで、ただ彼女が温かく居心地のいいように気をつかいながら、銘々の心の中で、以前の彼女と現在の彼女の変わりようを、じつと思ひ較べるのであった。彼女の顔は今では情熱も表情もなく、透きとおるばかりに冷たく蒼ざめ、その血脈を流れるのはもはや血液ではなくて、清水なのではあるまいかと疑われた。つい二、三年前までは、あんなに円まるまる々と肥って紅にかがやき、求婚者の噂をしたり、つまらぬことにも笑い転げたりしたのに。……

町の門近くまで来ると、トロイカは引き返した。十分ほどして僧院の前に停まると、オーリヤは櫓を出た。鐘の音はもう間遠に鳴っていた。

「皆さま御機嫌よう」と、オーリヤは尼僧の作法で低くお辞儀をした。

「じゃ、きつといらつしやいね、オーリヤ。」

「参りますわ、参りますわ。」

彼女は足早に、間もなく暗い門内に姿を消した。それから、トロイカが再び動き出したとき、皆はとても陰気に黙りこんでしまった。ソフィヤ・リヴオヴナは身体じゆうの力が

抜けたような気がして、すっかり滅入ってしまった。尼僧を無理に櫓に乗せて、正気でない人たちと一緒に引っぱり廻したことが、今では馬鹿げた無暴な、そして神聖を洗す所業のようにさえ思われた。酔いが覚めるにつれて、自分自身を欺こうとする気持も消え失せた。今ではもう、自分が夫を愛してもいず、また愛する気になれもしないことや、何もかもみんな愚劣な馬鹿げた事なのだということが、はつきり解った。彼女が結婚したのは打算からなので、学校友だちの言いぶりで言えば彼は断然お金持だったし、リイタのように老嬢になるのも怖ろしかったし、また医師の父にもあきあきしていたし、またひとつには小ヴオローヂヤをがっかりさせてやりたいという気もあつたのだった。結婚ということが、こんなにも辛い忌わしい重荷なことに、結婚する前に気がついていたらなら、彼女は世界中の富を呉れると言われても、決して嫁になどは行かなかつたであろう。だが、今となっては及ばぬ事なのだ。思い諦めるほかに途はなかつた。

彼等は家に帰り着いた。温かい柔かな寢床に横になつて夜衣にくるまりながら、ソフィヤ・リヴオヴナは暗い柱廊や、抹香の匂いや、円柱の傍の人影を思い出した。自分が眠っている間も、あの人たちはじつと身動きもせず立ちつづけているのだらう、と思うと堪らない遣る瀬なさがこみ上げて来た。長い長い朝勤めがすむと、讚禱がそれに続き、そ

れから弥撒^{ミサ}、謝恩の礼拝。……

「けど、神様というものはあるんだわ。きつとあるにちがいないわ。私だっていつかは死ななければならぬんだから、晩^{おそ}かれ早かれあのオーリヤのように、魂や永遠^{いのち}の生のことを考えなければならぬのね。オーリヤは今では救われたのだから。あの人は自分の問題をすっかり解いたんだから。……でも、もし神様がないとしたら？ そうしたら、あの人の生涯は破滅なのね。けれど、どんな風に破滅なんだろう？ なぜ破滅なんだろう？」

少したつと、またこんな考えが浮かんで来た。

「神様はあるわ。人間はどうしても死ななければならぬ。だから魂のことを考えなければいけないわ。オーリヤは今この瞬間に死がやって来たって、ちつとも怖がりはいしなくていい。覚悟が出来ているんだもの。何よりも大事なものは、あの人がもう自分の問題を解いていることだわ。神様はある。……そう、あるのだわ。……けど、僧院へ入るほかに、何か別の途はないものかしら。だって、僧院へ入るといふのは——生活とさようならすることだもの。生活を滅ぼすことだもの。……」

ソフィヤ・リヴォヴナは少し怖くなって、枕に頭を押しかくした。

「こんな事はもう思うまい」と彼女はつぶやいた、「もう思うまい。……」

隣室には、ヤアギチが何か考え事をしてしていると見えて、軽く拍車を鳴らせながら、絨じゆう毯たんの上を行ったり来たりしていた。ふとソフィヤ・リヴォヴナは、この男が自分にとって親しい大切なものに思われるのは、やっぱりヴラヂーミルという名前を持っているという事だけ、ただそれだけのせいではないかと気づいた。彼女は寢床の上に起きあがって、優しく呼びかけた。

「ヴォローヂャ！」

「何だね？」と夫の声がした。

「何でもないの。」

彼女はまた横になった。鐘の音が聞こえて来る。それはあの僧院で鳴らすのであろう。するとまた、柱廊や黒い人影が思い出され、神や避けがたい死のうえに、思いは当て途あどなくさまようのであった。彼女は鐘の音を聞くまいとして頭から夜衣を被った。老年や死が近づいて来るまでには、まだ長い長い生活が続くのだと彼女は考えた。いま寢室に入つて来て寢床にあがろうとしている男、この愛してもいない男の身近に、来る日も来る日も暮らさなければならぬ。そしてもう一人の、若いうっとりするような、彼女にとって掛け替えのない男への恋心を、じつと殺していなければならぬ、……彼女は夫に眸を向けて、

お眠みなさいを言おうとしたが、いきなり泣き出してしまった。自分が口惜しくてならなかった。

「そおら、音楽がはじまった」と、ヤアギチが言った。音の字を妙に延ばしながら。

彼女が鎮まったのはずっと後のことで、朝の十時近くになってからであった。やつと泣きやんで、身悶えも止まると、今度はひどく頭痛がし出した。ヤアギチは遅れた弥撒に急いで出かけなければならぬので、着替えの手伝いをする従卒にぶつぶつ小言を言っているのが隣室から聞こえた。彼は何か取りに、軽く拍車を鳴らせながら寢室へ入って来た。それからもう一度、今度は肩章や勲章を飾り立てて入って来た。リユーマチのせいで少し跛を引きながら。その歩きつきや眼つきを見ていると、何だか猛禽のように思えてならなかった。

やがてヤアギチが電話をかけているのが聞こえた。

「ワシーリエフスキーの兵営につないでくれ給え」と彼が言った。それからちよつと間を置いて、「ワシーリエフスキー兵営？ ドクトル・サリーモヴィチにお電話口までお願いしますって。……」また暫くして、「もしもし、どなた？ ヴオローヂャ君か。やあ。済まないが君のお父さんに、直ぐにお出で願いたいと申し上げてくれないか。実は令夫人が

昨夜のお蔭で滅茶滅茶めっちゃめっちゃなんだ。え、お留守だつて？ ふむ。……いや、有難う。結構だね。

……そりや御親切に。……多謝メルシ。」

ヤアギチは三度目にまた寢室に入つて来て、妻の上にかがみこみながら、十字を切り、手を差し出して接吻させた。(これまで彼に恋をした女たちが彼の手に接吻する慣わしだったので、それが習慣になつたのである。)そして、夕食までには帰るよ、と言ひ残して出て行つた。

十一時すぎに、召使が入つて来て、ヴラヂーミル・ミハイルイチがお出でになりましたと告げた。ソフィヤ・リヴオヴナは、疲労と頭痛とにふらふらしながらも、急いで毛皮の縁取りのついた新調の素晴らしい紫金色しきんいろの化粧着を引っかけ、手早にどうか髪をつくろつた。彼女は言いようのない心のときめきを感じた。そして嬉しさと、彼が帰つてしまひはしないかという怖れとで、総身が顫えた。一目でもいいから会いたかつた。

小ヴオローヂャは燕尾服えんびふくに白のネクタイを結んで、正式に訪問の威儀を正して来ていた。ソフィヤ・リヴオヴナが客間に入つて行くと、彼はその手に接吻をして、心から病氣の見舞を述べた。それから坐ると、今度は彼女の化粧着を褒めそやした。

「昨日オーリヤなんかに会つたもので、調子が狂つたんですの」と彼女は言つた、「はじ

めのうちは可哀そうな気がしたんですけど、今じゃあの人^{うらや}が羨ましくなりましたわ。あの人は、もう大磐石^{だいばんじやく}で、何が来たつてびくともしませんものね。けれど、ねえ、ヴオローヂャ、もつとほかの途があの人にはなかったものでしょうか？ 一体、生きながら自分の身を埋めてしまうことだけが、生の問題を解くことなんでしょうか？ それじゃまるで死も同然で、生じやありませんわね。」

オーリヤの話が出たので、小ヴオローヂャの顔は和らいできた。

「ねえ、ヴオローヂャ。あなたは賢い人だから」とソフィヤ・リヴオヴナは言いつづけた、「あの人に見習うにはどうしたらいいか教えて頂^{ちようだい}戴^{だい}な。そりや私、信者じやないのだから、僧院へ入ろうなんて思いませんが、それと同じ効目のある事がほかにないものでしょうか？ 私、生活が辛くてなりませんのよ。」彼女は暫く黙ってから言い継いだ、

「さ、教えて頂戴よ。……何か素晴らしい名案はなくて？ 一言でいいから、言つて頂戴。」

「一言でいいんですか？ じや如何です、タララ、ブムビヤー……というの。」

「ヴオローヂャ、どうしてあなたは私を馬鹿になさるの？」と彼女は語気を強めた、「あなたは私と話をなさるときには、お友だちやちゃんとした婦人方の前では使えないような、一種特別な、いいえ、悪気取りな物の言い方をなさるのね。あなたは学者として立派な方

だし、学問もお好きなのに、なぜ私の前では学問の話をして下さいませんか？　なぜですか？　私にそれだけの値打がないからですか？」

ヴォローヂャは当惑したように眉をしかめて言った。

「どうしてあなたは、そんなに急に学問の話がしたくなつたのです？　ひとつ憲法の方は如何ですか？　それともちようごめ蝶わさび鮫の山葵漬けなどは？」

「もう結構よ。どうせ私は馬鹿でやくぎで考えのない、つまらない女ですわ。……私は精神病で、自墮落で、することといつたら間違いだらけで、だから馬鹿になさるのは当り前ですわ。でも、ねえ、ヴォローヂャ、あなたは私より十も年上なのだし、夫は三十も年上なのよ。私はあなたの眼の前で育つたんですもの、もしあなたにその気さえあつたら、私をどうともお気に召す通りに、そりや天使にだつて仕上げることがお出来だつた筈よ。なのに、あなたは、（彼女は声を顫わせた）私に辛くお当たりになるのね。私がヤアギチミたいな年寄の所へお嫁に来るときにも、あなたは……」

「もういいですよ、もうたくさん沢山」と、身近にずり寄つて両手に接吻しながら、ヴォローヂャが言った、「そんな哲学なんかは、シヨーペンハウエルの連中に任せて、勝手に議論させておこうじゃありませんか。その暇に私たちは、こう、この可愛いお手に接吻しましよ

う。」

「あなたは私を馬鹿にしていらつしやるわ。それが私にとってどんなに辛いことか、解つて下さりさえしたらねえ。」どうせ本気にしてくれそうにもないので、彼女はおずおずと言つた、「どんなに私がこの境涯から抜け出して、新しい生活を始めたいと思つているか、解つて下さつたらねえ。私、こんな事を考えると、しみじみ嬉しくなってくるの」と言いつづけながら、本当に嬉しさのあまり涙ぐんできた、「善良な、潔白な、清らかな人間になつて、嘘うそもつかず、人生にちゃんとした目的を持つて、……」

「さあ、さあ、お願いだから思わせぶりはお止めやなさい。僕はそれが嫌いなんですよ」とヴオローヂャは言つて、疔かん持ちらしい色を浮かべた、「やれやれ、まるで芝居じやありませんか。お互いに人間らしくやりましょう。」

彼が忿おこつて帰つてしまわないようにと、彼女は言い訳をしたり、御機嫌を取るために強しいて笑顔を作つたりした。そして、またオーリヤの話を持ち出し、自分がどんなに生の問題を解きたいか、真人間になりたいかを話しはじめた。

「タラ……ラ……ブムビヤー……」と彼は忍び声で口ずさんだ、「タラ……ラ……ブムビヤー。」

そしていきなり彼女の胸のまわりを抱えた。彼女の方では、何のことやら自分でも解らずに、両手を彼の肩に置いたまま、暫くはうつとりと眼が眩んだようになって、彼の聡明な皮肉な顔や、額際や、眼や、美しい髻をじっと眺めていた。

「私があなたを愛していることを、ずっと前から知っていらしたくせに。」彼女は打ち明けると苦しいほど顔が火照った。羞しさで唇までが引き攣つて言うことを聴かないように思えた、「私、あなたを愛してますわ。どうしてあんなに私を苛めるの？」

彼女は眼を瞑つて、彼の唇に強く接吻した。そのまま長いこと、一分ほども、われながらみつともないと思ひ、さすがの彼にも呆れられはしないかと思ひ、召使が入つて来はしないかと氣づかないながら、どうしても唇を離すことが出来なかつた。……

「ああ、あなたは私を苦しめるのね！」と彼女は繰り返した。

それから半時間ほどの後、自分の求める総てを得てしまった彼は、食堂に坐つて口を動かしていた。彼女がその前にひざまずいて、貪るように彼の顔に見入っていると、彼の恰好が、まるでハムの片を投げてくれるのを待っている小犬のようだと云つた。やがて彼女を自分の片膝の上に坐らせ、赤ん坊のように揺すりながら、口ずさんだ。

「タラ……ラブムビヤー……タラ……ラブムビヤー。」

それから彼が帰り仕度をはじめると、彼女は熱情に声を顫わせて訊いた。

「いつ？ 今日？ どこで？」と言いなから、彼女は両手を彼の口へ差ししのべた。両手で彼の答えを掴つかまえようとするかのように。

「今日は少し都合がよくないな」と彼は首を傾かしげた、「明日ならなんとか。」

二人は別れた。夕食のまえに、ソフィヤ・リヴオヴナは僧院にオーリヤを訪ねた。が、オーリヤは死者のために詩篇を誦よみに外出しているとかで、会えなかった。僧院の帰り途に父親の家へ行つて見たが、やはり留守だった。それから彼女は別の櫛を雇つて、何の目当てもなしに通りや横路を、ぐるぐると日暮れまで乗り廻した。そうしているうちに、ふと、どこへ行つても心の安まる場所のなかつた叔母さん、あの眼を泣きはらした叔母さんのことを思い出した。

夜になると、またトロイカに乗つて郊外の料理店へ行き、ジプシイの唄を聴いた。帰りにまた僧院の前を通りかかると、ソフィヤ・リヴオヴナはオーリヤを思い出した。そして、自分のような境涯にいる娘や女にとつては、トロイカを乗り廻して嘘をついて暮らすか、さもなければ僧院に入つてわれとわが身を生き埋めにするか、この二つに一つなのだと思つて、傷いたましい気持ちになつた。……翌日あひびきも逢あいひ逢ひのあとで、ソフィヤ・リヴオヴナはまた

一人で櫓を雇つて乗り廻し、叔母さんのことを思い出した。

一週間たつと、小ヴォローヂャは彼女を見棄ててしまった。その後では、また以前どおりの味気のない退屈な、時によると苛立たしい生活が続いて行つた。大佐と小ヴォローヂャは何時間も撞球やピケット遊びに耽るし、リイタは面白くもない一口噺をだらだらした調子で続けるし、ソフィヤ・リヴォヴナは二六時ちゆう櫓を雇つて乗り廻し、夫の顔さえ見ればトロイカに乗りましようよと強請せがむのであつた。

彼女は毎日のように僧院を訪ねて、オーリヤをあきあきさせながら、自分の堪たえられぬ苦しさを訴えたり、涙をこぼしたり、そうかと思うと、自分のあとを躐つけて何かしら不潔な厭いとわしい、むさ苦しいものが、僧院にまで入り込んで来たような気がしたりした。オーリヤの方では機械的に、日課の暗誦あんしようのような調子で、この世のことはすべて仮事で、すべては過ぎ去り、神様はお許しになるでしょうと繰り返した。

(В о л о д я б о л ь ш о й и В о л о д я м а л е н ь к и й, 1893)

青空文庫情報

底本：「カシタンカ・ねむい 他七篇」岩波文庫、岩波書店

2008（平成20）年5月16日第1刷発行

2008（平成20）年6月25日第2刷発行

底本の親本：「チエーホフ全集 第九卷」中央公論社

1960（昭和35）年発行

入力：米田

校正：noriko saito

2011年1月4日作成

2012年2月21日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

大ヴォロージャと小ヴォロージャ

ВОЛОДЯ БОЛЬШОЙ И ВОЛОДЯ МАЛЕНЬКИЙ

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 アントン・チェーホフ Anton Chekhov

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>